広報おおいしだ 2020/6 No.768

別冊 おおいしだものがたり
～資料館資料編～

■『肘折温泉』
『金山平三展』より

『肘折温泉』

資料館で現在開催中の「金山平三展」から『肘折温泉』をご紹介します。

本作は温泉宿を捉えた４号の油彩画で、「板」に描かれています。金山は後期の小品には板を選択することがありました。板に描かれた作品には、画布や紙などの素材にはない特有の艶があり、ウェットな質感を持っています。自分の画が百年後も良好な状態で鑑賞されることを望み、画材への強いこだわりを持っていた金山です。このような質感の特性に無頓着であったはずはなく、板の使用には何らかの意図があったと考えられます。ではその意図とは何だったのでしょうか。

金山は東京美術学校西洋画本科を卒業後、1912年から４年間フランスへ留学しました。金山と同年代の画家では、石井柏亭や藤田嗣治、安井曾太郎、梅原龍三郎らが金山と前後して渡仏しています。通常留学先ではアカデミー等に所属し、制作しながら学ぶものでした。しかし金山は特定の師につくことはなく、留学中最も熱意を示したのは油彩技術と油絵具そのものの探求でした。

ところで、留学先で才能を開花させた画家たちの多くは、帰国後急に描けなくなってしまう傾向がありました。問題となったのは、西欧で生まれた油彩と日本の気候や風土との相性にあり、油彩技法を日本的なモティーフにどう順応させるか、という点が彼らの課題となったのです。上記の留学生たちは、それぞれ異なった方法で回答を導き出した画家でもありました。

この課題に対し金山が出した回答は、自らの鋭敏な色彩感覚を駆使することでした。西欧に比べ色彩に乏しいとされる、日本の風景に潜む微妙な色を確実に捉え、思い通りに画面に再現していくことで解決を図ったのだと思われます。その筆は、時に伸びやかに、時に緻密に、一見粗雑かと思えばその色調は驚くほど変化に富んでいます。このように絵具が持つ効果を十分に発揮できたのは、素材について強い関心を持ち、高度な熟達があったからこそでしょう。板を支持体とする意図も、この回答の一環といえるかもしれません。ある種の景物を描く際、板に描くことで得られるマティエール（質感）が、自らが望む色彩の表現に適していると考えたのではないでしょうか。

『肘折温泉』を描く画家の視点はやや高めにあり、一階と二階を切り抜いたような構図です。空は描かれませんが、陽光を照り返す壁面から、強い日差しの下で描かれたことを窺わせます。外光が強いぶん室内の影の色も濃く、明暗のコントラストが鮮やかに目に映えます。ほぼ真っ暗な室内にぼんやりと浮かびあがる人影は、暗闇に溶け込んでしまいそうなほど曖昧です。しかしそれがかえって存在感を放っていて、完全な暗闇の中にいる人の気配さえするようです。ある昼下がり、この宿の向かい側の小窓からちょっと覗いてみた、というような趣があり、温泉場の湿潤な熱気とともに硫黄の匂いまで漂ってきそうな臨場感があります。

「金山平三展」は７月12日（日）まで

楽がき帳

突然ですが、皆さんは小平地区に行ったことがありますでしょうか。私はこれまで行ったことがなかったのですが、先日機会があり、地域おこし協力隊の大野さんや小平地区出身の方など５名で散策に行ってきました。

道中はなかなかハードで、だんだんと道が険しくなり、車の底を擦りそうなでこぼこ道を抜けると、ポツンと１軒の民家が見えてきました。この民家は、小平地区に15年ほど前まで住んでいた方の家らしく、小平に唯一残る建物になります。周りは木や草が生い茂り、今となっては集落があったとは思えない光景でしたが、さらに進むと、「小平部落跡地」の石碑があり、確かにここが小平地区であることを物語っています。

昭和47年に小平地区から曙町地区へ集団移転が行われ、半世紀近くが経とうとしています。次第に集落が自然に帰っていく姿にどこか寂しさを感じた散策でした。（松）

※この人数は外国人も含めたものです。

町の人口	令和２年６月１日現在	
世帯数	2,333戸	（－２）
総人口	6,827人	（－９）
男	3,352人	（－６）
女	3,475人	（－３）
（５月中の異動）		
出生 ３人	転入 12人	
死亡 14人	転出 10人	

◇編集・発行 大石田町総務課
〒999-4112 山形県北村山郡大石田町緑町１番地
☎0237-35-2111 FAX 0237-35-2118
◇印刷 ㈲印刷 文化堂